



謹賀新年

新しき年を迎えさせていただきます。
本年もよろしくお願ひ致します。

天理教祝梅分教会

高橋 太志・多江子

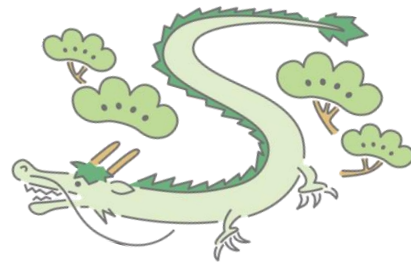
十二月 月次祭 神殿講話

今年一年の納めの月次祭を皆様と共に勇んでおつとめさせていただきました。誠にありがとうございます。ありがとうございました。

振り返ると祝梅分教会では、神殿の参拝場の畳の下の垂木とコンパネを交換させて頂きました。皆様のおかげです。ありがとうございました。

また、この一年を振り返ると、思い出しても喜びが自然と湧いて

発行所
天理教祝梅分教会
千歳市祝梅 598
☎0123-29-2055
復刊第三十三号



くるような事があつたり、思いがけない出来事に心を曇らし、今も心が晴れず苦しんでいる時があつたりと、お一人ひとり 色々と思ひ出されるかと思ひます。

十一月には、私自身が新型コロナウイルスに感染し、皆様にはご心配、ご迷惑をお掛けしました。病気になるって本当に健康であることと、のありがたさや、普通に飲んでいた水のありがたさを感じました。味覚障害や睡眠障害などあり

ましたが、少しずつ快復しております。

まもなく、新しい年を迎えます。よく父は「大難は小難、小難は無難にお連れ通りいただいた」と言っていました。また朝づとめ

の後に祈願をされる時も今日一日大難は小難に、小難は無難にお連れ通りくださいと言上されていま

した。大難は小難、小難は無難にお連れ通りいただいているのだという御守護の喜びは忘れてはいけないと思ひます。御守護を感じていけば、不足や不安ではなく、喜びと感謝が生まれてきます。必ず親神様は私達を成人へと導いてくださり、どんな中でも喜べることを教えてくださっています。

そして、おさしづには「世上が鏡 いかなるもかりもの 心わがも

の 心通り 鏡に映してある」

(明治二十一年七月二十九日)

というお言葉があります。自分の姿は自分の目で見ることはできません。だからこそ自分以外のところで見せてもらっているのです。

また、年末にはいつも父が話しているように、礼肥、お礼肥(おれいごえ)・礼肥(れいごえ)が大切であると聞きます。これは、果

実の収穫後や開花期の終わりに、疲弊した植物への栄養補給の為に与える肥料のこと。実りや花を与えてくれた感謝の気持ちを込めて礼肥と呼ぶ。と説明があります。私達も一年通らせて頂いたお礼をしつかりとさせて頂く中に新しき年を結構に通らせていただけているかと思ひます。

今年一年ありがとうございます。来年もよろしくお願ひ致します。

「令和六年能登半島地震」被災地の皆さま方へ

このたびの「令和六年能登半島地震」によりお出直しになられた方々、ならびに関係の皆さま方に対し、お悔やみを申し上げます。

また、被災されました方々に対し、心からお見舞いを申し上げます。被災地域の皆さまの一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

『単独布教時代』

祝梅分教会3代会長

高橋美津志

美津志会長さんが平成八年三月号の『陽気』の中で座談会でお話された内容の抜粋し編集させていただきました。愛知布教、東京布教のエピソードをお届けします。

私の息子（四代太志会長）は大學を出て自ら愛知布教の家に入ったのですが、その志を立ててくれたのは、私の名古屋布教の話聞いてからなんです。

昭和二十六年、二十歳の時、私は入信と同時に修養科に入り、終了後、兵神大教会で青年づとめを

させていただきました。そして七ヶ月後の大教会春季大祭の日、当時の清水国雄大教会長様に呼ばれ「布教の家愛知寮に入寮して、単独布教をしないか」とお声を賜ったんです。私はかねがね布教に出ようと考えていましたが、まだ入信して日も浅く教理が身に付いていませんでしたから、もうしばらく大教会の青年づとめをつとめたいとお願いました。そしたら、大教会長様はこうをおっしゃったんです。「言葉を返したら理が消える。お前を一人前の布教師にしたいと親神様の思し召しを伝えさせてもらっているのに、それを、我が身かわい先案じの心で断れば、親心に背を向けて自ら不幸な人生を歩んでいくことになる。お道は素直が第一。小寒さまは教理が身について浪速に布教に出られたのか」。そうして昭和二十七、

私は布教の家愛知寮に入寮しました。

その一年後の昭和二十八年、私は名古屋で布教の家の同期と二人で、そのまま野宿の単独布教を始めました。瑞穂区の一角の小高い丘の上に、足腰を伸ばして休めそうな防空壕を見つけ、最寄りの交番へ身元保証人として教区長の谷岡先生の名前を届けて許可して頂きました。ある朝、防空壕で起きて朝づとめのため教務支庁の入り口まで来たら、五、六人の警官が走り寄って来て、私たち二人に手錠をかけたのです。そして教区の皆の目の前でジープに乗せ、オートバイで護衛しながら昭和警察署に連行しました。実は前の晩に、住宅へ二人組の強盗が入ったのです。私たちは強盗容疑だったのですね。すぐに別々の留置場へ入れられ、取り調べを受けました。「お前たち何を仕事にしている」「天理教の布教師です」「じゃあ給料はいくらだ」「もらっていません」「も

らってなくてどうして食べるのだ」「食べてもいけません」「何！金がない！食べてないから強盗に入ったのだ」とね。蹴り飛ばされたりしたのです。昼、夜も取り調べでね。「もう一人はちゃんと白状している。白状しなければお前の方が、罪が重くなるぞ」と自白を強要するのです。でも「一切しておりません」で通しました。

その二日後、強盗が捕まりました。疑いの晴れた二人は二階にある百畳ほどの刑事達の控え室へ連れて行かれ、警官たちが昼食を食べている前で「お前たちが命がけで布教している天理教の話をしてみる」と言われました。その時は感激しましたね。二人で交代しながら、しゃべりまくりました。「もういい、申し訳なかった」そして「お前たちがいざ野垂れ死にしても身元がわかるように指紋をとってやる」と指紋を取られました。その夜からはまた野宿でした。教務支庁の隣の鶴舞公園で休んでいたら、巡回中の警官が私の

顔に懐中電灯を向けて「名前は」と聞くのです。「天理教布教師の中島（旧姓）だ」と答えたら、手帳を見ながら「ゆっくり休みなさい」と言いました。名古屋市内全部に、私たちのことを通達してくれたのですね。おかげで天下晴れて野宿ができることになりました。

こんな話をするので、息子は愛知布教へ出たのです。また一昨年にも、教会に住み込んでいた青年が「布教の家にいかせてくれ」と言って東京へ行きましたが、彼も私の東京布教の話聞いて志したのです。

その後、昭和二十九年に大教会長様のお声で、布教地を名古屋から東京へ移したんです。浅草で布教に歩いていると、ある日お寺の裏で五、六人からリンチを受け、血だるまで倒れている男を見つけてね、その青年を自分の住んでいた集落の一角へ連れて帰りまして。

わけを聞くと、彼は東京で一旗あげようと、群馬にたった一人の母親を置いて出てきていたので。ところが仕事で肌合わなくてテキ屋になり、テキ屋からヤクザになったのですね。独自に恐喝して巻き上げた金を自分で使ったため制裁を受けたと言うことでした。私はなんとか彼をヤクザから抜けさせて、郷里の母親の元へ帰らせてやりたいと思い、掘っ立て小屋のような自分の家に住ませ、廃品回収業者の仕事させました。

一週間ほどすると、隣のおばさんが「先生、二人組のヤクザが青年を探しに来た。危ないから逃げたほうがいいよ」と言うのです。「失敗した。あんな奴、相手にしなければよかった。何されるか分からない」と人間心が出てね、不安になったのです。でも単独布教へ出る時、私は大教会長様から「受ける心」と言う色紙を書いていただいていたんです。何があっても逃げてはならない、受けて通

れと言う事ですからね。破れかぶれの春心境でいたら、七時過ぎに二人組のヤクザが来て「おい、天理教出てこい」と言うんです。表に出ると「歩け」と言って後からついてくるのです。弱みを見せたら絶対ダメだと思って腹に力を入れたら、途端にブルブルと震えてきました。工場の焼け跡につくと、「お前はうちの組の男を働かせているそうじゃないか。その金はどうした。示しがつかない」と言

って取り出した七寸五分の短刀を私に持たせ、「かかってこい」と促すのです。始末をつけると言う事なのです。短刀を握った途端にブルブルと震えて、腰が砕けるような感じがしました。

この時、私は思ったのです。「母親の死から入信した私には母親がない。だが、あの青年には彼の帰りを待つ母親がいる。私の身に代えてもあの青年だけは助けて郷里に帰してやろう」と。私は短刀を捨ててそこに座り「あの金は、青年を郷里に帰してやりたくて一

切、手をつけていない。彼には真面目な人生を通らせてやりたいのです。私はどうされても良い。あの青年だけは助けてやってくれ」と涙を流しながら頼み、手を合わせて目をつぶりました。わずかな時間だったのでしようが、私にとっては長い時間でした。風が吹くたびにぶるっと震えて、刺されたのじゃないかと思ってね。

何事もないので目を開いたら、ヤクザは短刀を鞘に収め、また「歩け」と言うのです。今度こそ人気のないところで刺されると覚悟して歩いていくと、飲み屋の前で「入れ」と言われました。「ヤクザとは情深い物だな。末期の酒を飲ませてくれるとは」と思いながら暖簾をくぐり言われるまま特級の酒を飲みました。



するとヤクザの兄貴分らしい男は、二級酒を飲みながら言いました。「俺にも母ちゃんや子供がいる。だが足を抜けたくても抜くことができない。あいつなら、今なら抜かれる。俺が若い時にあなたのような人に出会ってたら助けてもらえたのに…。せめてあいつだけは助けてくれるか。組長には探しがいなかった、あんな奴はほっておきましょうと言っておく。だからこの東京から逃してくれ。：あんだ度胸ええなあ。動いたら刺そうと思っていたよ」と。その時「逃げなくて良かった」と心から思いました。そしてすぐ家へ帰り、廃品回収業者に話をして働いたお金を全部もらい、その夜、青年を逃しました。

単独布教時代のお助け話に感動した住み込みの青年は「会長さんが歩いた道を歩きたい」と言って、東京布教に出てくれたのです。去年の一月、彼は私がかつて大教会長様に言ったのと同じこと



冬の一日少年会 報告

2024年1月7日(日)祝梅分教会において、冬の一日少年会を行いました。参加者は少年会員4名(うち、幼児1名)、スタッフ6名、教会・ひのきしん8名、総勢18名の御守護をいただきました。

最初はおてふり・鳴物練習として、朝夕のおつとめやよろづよ八首の練習を行い、その後のお楽しみ行事では少年会員と婦人会、スタッフと一緒にゲームを楽しみました。

例年よりも短い時間でしたが、会員の皆様方が楽しく過ごさせていただいたひと時でした。

を言いました。「教理の勉強ができていせんから専修科に行かせてください」と彼は三十二歳です。生涯道を通る心を定めてくれた。ありがたいことに私の通った道を皆、歩んでくれていっているのです。自らの姿勢が大事なのだとしみじみ思っています。



あとがき

年明けから大地震、航空機事故と大きな出来事がありました。皆様それぞれに一日も早い復興を神様にお願ひして下さっている事と思います。それと同時に、十二月の神殿講話にありましたように、今日一日、大難は小難に小難は無難におつれ通りいただいている御守護の喜びを忘れずに、感謝の心で通らせていただきたいと思っています。

そして、今月は美津志会長さんの単独布教時代のお話を掲載させていただきました。来月も『陽気』の座談会から単独布教時代のお話を掲載させていただきますと思います。美津志会長さんが歩いた道を何分の一かでも、歩かせていただきたいものです。

皆様、あけましておめでとうございます！



布教の家、残り三ヶ月がんばります！（長男 悟志）